びぶりおてか

同志社大学図書館報　№34．1983．10．1

図書館雑感

図書館長　佐　藤　幸　夫

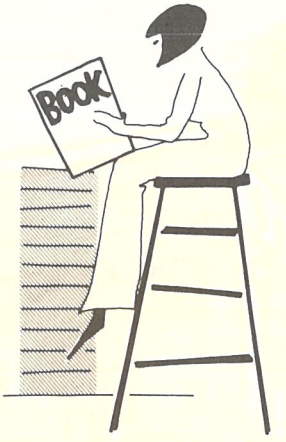
これまで，図書館については，利用者としてサービスを受けているだけであったから，館長の仕事をするようにと命ぜられたときは，非常にとまどったものである。もともと，図書館長なるものは，たとえば，国会図書館長は，「図書館について深い理解があり，国際感覚の豊かな，学識，経験，力量にすぐれた，日本人を代表する文化人であることが望ましい」とされている。大学図書館の館長についてもこれに相当する資質が要求されるところであろう。これまでの先輩館長の先生方は，いずれも，同志社大学を代表されるような，広い学識と高潔な人格をそなえた立派な人物であられたから，大学図書館は，現在，研究と教育の中心的な機能を果たす枢要な存在にまで発展してきている。それにひきかえ，私には，図書館活動に関する十分な知識も識見もあるわけではないから，これから，付焼刃で，一夜漬けの勉強に苦しみながら，図書館本来の目的を達成するため，大いに奮励努力いたさねばと考えているのである。

わが国における大学図書館の館長は，古くから，殆んどの大学において，教授による兼任館長制がとられてきた。それ

目　次

図書館雑感……1
山国隊員高室誠太郎の手紙……3
関西四大学図書館相互利用について…5
国語学・日本語学に関する
二次文献（31）……6
実例を中心とした
資料のさがし方（24）……9
ピックアップ
日本における最初の英語教師……12

は，国立学校設置法施行規則が，図書館長は教授をもって充てる，としていることに，ひとつの理由があるらしい。それに，国立大学では，教務部長職が存在しないから，図書館長は，ただ単に一部局の長というよりは，全学的な視野からする学長の補佐役的な機能を果たしていることも他の理由のひとつであろう。これに対し，図書館界においては，教授による兼任館長制は，中途半端で不徹底だと考えられている。教授による専任の館長が望ましいとされているのである。そして，私立大学では，教は少ないが，専任館長制をとる大学もみられる。また，さらに徹底すれば，図書館学に裏打ちされた専門職，すなわち司書職による教授専任館長制が希求されているようである。諸外国には，すでに，教授資格を有する専門職の専任館長が存在しているから，わが国においても，将来は，そのような館長が誕生することであろう。以前，私が留学していたコロンビア大学では，faculty memberでProfessor of Lawのstatusを有する人物がLaw Libraryのボスであった。



ところで，わが国の大学において，図書館が，他の部局と異なった独自の機能をもつ存在として認識された頃，それは，「図書ヲ貯蔵スル所」と考えられていたのである。図書館が，大学における研究・教育活動のために重要な基本的施設として認識され，研究室，教室の延長またはその一部としての使命を果たすべく意識されてきたのは，もっと後のことである。研究者にとっても，「図書ノ貯蔵所」から借出した黴の臭いのする数冊の文献を繙くだけで，新理論をうちたてることのできた時代はさておき，学問の水準が高まり，文献・資料の量が無数に増大した現在では，適切に収集され，蓄積された情報を提供してもらう場としての図書館が，どうしても必要となる。また，教育の方法も，lecture methodだけでなく，class discussionが重要視されてくると，講義の前，後における学習の場としての図書館が入用となる。こうして図書館には，「図書ノ貯蔵所」以上の機能が必要となってくる。そこで，現在，大学図書館は研究図書館，学習図書館，それに総合図書館など，それぞれの機能を果たさねばならないとされている。コロンビアには，ひとつの巨大な中央図書館のほかに，30以上のLibraryが存在した。そのうち，Law Schoolでは，case methodによる教育方法が採用されているから，Law Libraryは，学習図書館としての機能が必須のものとして整備されていた。開架式で，複本や複数のセットが多く，参考業務は完璧で，コンピューターの端末機によって資料の内容の検索も可能であった。学生は，学期中，昼も夜も休日も，殆んどの時間をこのLibraryで過すのである。そして，学生の学習によりProfessorの研究が阻害されぬようとの配慮から，faculty専用の研究図書館としての資料室も完備していた。そのほかいくつかの図書館をも利用したが，概ねこれと同様のものであった。

わが同志社大学では，研究室の資料室が研究図書館として，また，図書館が学習図書館として意識されている。しかし，本学図書館は，学習図書館としての機能のみならず，実際には，研究図書館としての作用をなしているし，かつ，総合図書館としての機能をも果たしているのが現状である。将来，田辺に分館が設置されると，今出川図書館は，中央図書館ないし総合図書館としての機能を，もっと明確に，果たさねばならないことになろう。そうなると，中央図書館，分館，それに部局図書館としての研究室や研究所との間の様々な問題をどのように考えるか，全学的な図書館行政のなかで，誠に重要な課題である。

このところ，大学図書館に対して，数多くの具体的な要望が寄せられている。それらはすべて，図書館にかけられた熱い期待からくるところのものである。同志社大学の研究・教育の質的進展のため，図書館に対し，全学より信託せられた重要な役割を果たすべく，図書館自体も，これから，一層の奮起が必要となる。

山国隊員高室誠太郎の手紙

仲　村　研

本年５月25日，人文科学研究所の第12回公開講演会が開催され，私は「村人（もろと）と町衆（ちょうしゅう）」という題で，室町・戦国時代の村落と都市との基本的構成員の身分と自治について講演した。講演後，４通の質問用紙が私の手元に届けられ，書面で質問にたいする解答をおこなった。質問者の１人に高室悟子という方がいて，質問用紙の後半の部分に「(前略)ちなみに私の家にある古文書らしきものによると，私の祖先は丹波の山国というところで庄屋をしていたらしいのですが，起源は平安京造営時からということになっています。そういった古くからの地主的存在と惣（この場合，中世の自治的村落のこと　仲村注）は，どういう関係があったのか，お聞かせください」とあった。私は高室さんに解答の書面をしたためたのち，「丹波山国に出自する高室さんということであれば，高室誠太郎のご子孫ではないでしょうか」と付記した。高室悟子さんがどのような人であるか，講演会場では全く見ず知らず，質問用紙でのみ知った人であり，ましてや，先祖が高室誠太郎という人物であるかどうか，全くの当て推量であった。強いていえば，直観というものであろうか。

暫くして高室悟子さんが私の研究室を訪ねてみえた。高室さんは本学の文学部社会学科の３回生で，やはり高室誠太郎の５代目の子孫だということであった。前置きが長くなったのでここらで説明しておかなくてはならない。高室誠太郎という人物は，明治維新のさい，丹波国桑田郡山国地域の塔村(とのむら　京都府北桑田郡京北町塔)出身の青年で，山国地方で組織された農兵隊（のちに山国隊（やまぐにたい）と称される）の構成員として出征し，下野国都賀郡安塚村（栃木県下都賀郡壬生町）での幕府軍との戦闘で重傷を負った人物である。

山国隊という農兵組織は，慶応４年(1868)１月４日，山陰道鎮撫使西園寺公望の檄文に呼応して，山国地方で由緒連綿の家柄を誇る名主(みょうしゅ)が中心になって結成されたものである。１月11日に山国五社明神の境内で86人の農民によって結成された農兵隊は，その後，因幡鳥取藩の付属として従軍するか，朝廷直属の兵となるかで隊論が二分し，親兵組（朝廷直属を主張）と山国隊（因幡藩に属しても官軍であると主張）とに分裂した。山国隊は総員94人となり，59人が京都に残留して中立売御門と桂宮御所の警備にあたり，35人（うち２人は病気などのため帰郷）が官軍の東征に参加したのである。その東征軍35人の中に22歳の高室誠太郎がいた。

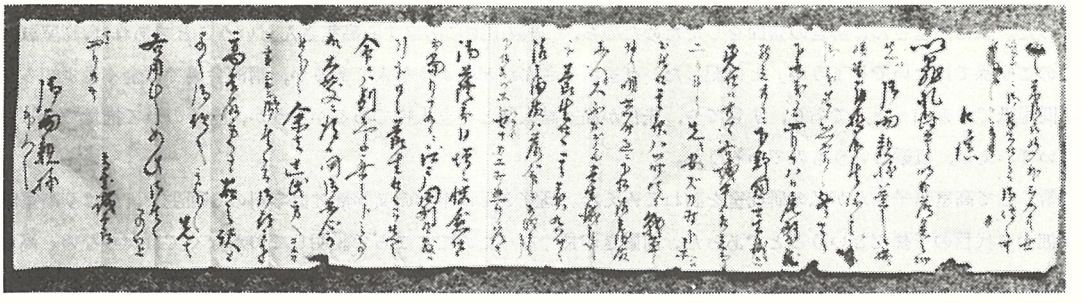
慶応４年４月22日の払暁，大鳥圭介の幕府軍と下野国安塚辺で激しい戦闘が展開されたが，この戦いで山国隊は２人の戦死者，１人の行方不明者，重傷２人，軽傷２人の犠牲者を出している。高室誠太郎は胃部から背中へ貫通銃創をうけ重傷であった。山国隊の隊長は因幡藩司令原六郎であったが，農兵隊側の指揮者(取締)は藤野斎（日本時代劇映画の父といわれた牧野省三の父）であった。藤野は山国隊行動日記ともいうべき『征東日誌』の中で高室負傷の場面を次のように書いている。

> 高室誠太郎負傷セルヤ，実ハ軍監タル四宮要三郎賊ト誤視シ討タル也。其先，高室炮(銃)ヲ置キ，抜刀シ賊ヲ遂(逐)ヒ川ヲ渡リ，賊東岸ニ上ル。刀ヲ以腰部ヲ突，賊回顧シ刀ヲ掲ケテ伐ントス。高室スカサス其腹ヲ刺ス。賊川中へ倒ル。呼ハリ云，賊ヲ切タリト。西岸ニ登ラントスルノ際，四宮之ヲ誤聞シ，元込七連炮ヲ以之ヲ狙撃シ，其腹ヲ討抜ケリ。高室呼ッテ云，因藩我ヲ打タリト。急処ノ深手其儘河中ニ転墜シ流レ，賊体ト石橋ニ挟マレリ。平井利三郎・藤野宇之佐，之ヲ遥ニ見，走リ，直チニ救ヒ揚ケ背ニ負ヒ病院ニ来ル。強胆精神尚慥(たし)カ也。

時代祭行列とは別に、現地山国地方でも、安塚の戦いを記念して、４月22日に山国隊のパレードが催される。

高室誠太郎の負傷は，因幡藩軍監四宮要三郎の誤射であった。高室は本隊が宇都宮城攻略戦に参加し，日光へ進駐している間，壬生城内に留まって療養し，翌月の閏４月19日に因幡藩の傷病者とともに壬生を出発し，山国隊員３人の付き添いとともに，本隊より一足先きに江戸の因幡藩中屋敷へ帰着した。江戸へ帰着した高室は丹波山国塔村の両親へ書面をしたためた。

慶応４年閏４月22日付の両親宛の書面の写真がいま私の手元にある。これは高室悟子さんが自家所蔵の文書として私の研究室へ持参されたもののうちの１点である。人文科学研究所所蔵の「丹波国桑田郡第十九区塔村戸籍」(明治５年の壬申戸籍写）によって，誠太郎の両親の年齢を逆算すると，父治左衛門は62歳，母いわは55歳である。この書状を紹介しよう（文中の( ) は仲村注)。



尚々栄治郎始メ三人共，無事ニ御奉公仕候間御伝へ可被下候。以上。

口　演

以飛札得貴ゝ(意)明候。薄暑之砌，先以御両親様益々御機嫌能被遊御座，珍重之御義，奉懇命(願)候。然者，下拙義も四月十八日尾州屋敷(江戸市ヶ谷)罷立，廿日ニ下野国壬生城迄着仕候。廿一日右城中ゟ相立事二リ(里)計リ先キ，安ズカ(塚)村と申所江出張仕，其夜八ツ時頃ゟ戦争始り，明六ツ時過ニ下拙・治兵衛殿両人共，大ふかデ(深手)ニ而，壬生城江引取養生仕候。其夜九ツ時ニ治兵衛殿ハ落命ニ相成申候事，下拙キヅ所(ハラ)ゟセナカエ打ぬけ候得共，御蔭ニ而，日増ニ快愈(癒)仕候而，当月十九日ニ江戸因州屋敷へ引取，日々養生仕候間，先々命ニハ別じょ(条)無之ト之事故，大慶ニ存候間，御安心可被下候。余者辻氏方へコムカ(細)ニ書シルシ参リ御座候間，御尋可被下候。高治殿方へも，右之訳も早々御伝へ可被下候。先者右用計リ，如此御座候。早々以上。

閏四月廿二日　　高室誠太郎

御両親様
外人々

ここで「栄治郎」とは，誠太郎と同じく塔村出身の草木栄治郎のことで，当時18歳である。「栄治郎始メ三人共」というのは，栄治郎，誠太郎と平井利三郎の３人で，塔村出身の名主仲間であろう。「治兵衛殿」「高治殿」とは塔村出身の名主高室治兵衛で32歳であった。草木は軽傷，高室治兵衛は戦死している。「辻氏方」は塔村の隣村鳥居村の辻彦六のことで，子息の辻啓太郎(32歳)・繁次郎(28歳)兄弟も従軍しており，啓太郎は安塚で重傷を負っている。

誠太郎らの負傷の様子は，先に藤野斎から丹波山国へ通報されたに違いないが，快方にむかい，江戸へ帰着した誠太郎は先ず両親へ消息を知らせたのである。しかし，傷は書面をしたためるほど快復してはおらず、書面の冒頭に「口演」とあるように，誠太郎の言うことを隊員が代筆したものである。本隊と分れて誠太郎を江戸へ送ったのは，水口源次，高室重造，塔本清助の３人であるが，代筆は水口源次と思われる。

山国隊員35人は東征中，戦死者４人(うち行方不明１人)，病死者３人，負傷者４人の犠牲を出し，明治２年２月に丹波山国に帰還した。因幡藩に付属しながら戦費自弁のこの農兵隊の行動は興味つきない。私は10数年以前に，人文

科学研究所の共同研究として中世・近世山国地方の社会構造を勉強し，その余禄として山国隊の軌跡を追ったことがある。そのことがあってか，この度隊員の書状を子孫から提供されたときの感激はひとしおなものがあった。先年，高室治兵衛が戦死し，誠太郎が重傷を負った安塚の姿川のほとりに立ったことがあり，この書面を読むにつけても姿川の風景が目前に点滅して仕方がないのである。

（人文科学研究所教授）

参考文献　1．丹波山国隊史　水口民次郎著　宗教法人山国護国神社刊　1966
2．山国隊　仲村研著　学生社刊　1968
3．征東日誌―丹波山国農兵隊日誌―　藤野斎著　仲村研・宇佐美英機編　国書刊行会　1980

研究者・大学院生のための
関西四大学図書館相互利用について

関西四大学（関西学院・関大・立命館・同志社）図書館相互利用協定が締結されたのは，昭和56年４月であった。四大学図書館が，蓄積した情報資源（学術図書・雑誌等）を共同利用する目的ではじめられ，今日までかなりの利用者が，便宜を受けてきた。しかしながら，大学図書館間の相互協力の先駆けとして，更に一歩踏み出すべく，相互利用関係の推進，改善について模索してみる機運が高まり，四大学の実務担当者の間で審議が重ねられた。四大学それぞれがもつ，特有な機構のもとで情報サービス活動を行っており，又，多くの難問を抱えている実状のなかで，現在共通して推進・改善出来ることを検討したところ，とりあえず四大学に在籍する教職員，大学院生が，他の三大学の図書館を直接利用する場合に限り，以下に述べる方策が，打ち出され，四大学図書館長会議の議をえて，本年４月より発効する運びとなった。

改正された相互利用協定では，関西四大学に在籍する教職員，大学院生が，他の協定館の利用を希望する場合，各大学の発行する身分証明書あるいは学生証を持参し，所定の手続きをすれば，閲覧，貸出し，文献複写等の便宜を受けることができるようになっている。改正前の協定が，他館利用を希望する都度，本人の所属する図書館へ行き，依頼状の発行を受けて，それを持参しなければならなかったことと比較すると，すこぶる気軽に，容易に利用可能になったと思われる。

身　分	貸出冊数	貸出期限
教職員	10冊以内	１カ月以内
大学院前期・後期及び修士課程に在籍する学生	３冊以内	２週間以内

とりわけ，特筆すべきことは，図書の帯出希望をする場合，所定の手続きをとれば，館外貸出しの便宜を受けることが可能となったことである。貸出し冊数及び期限は，左表の通りである。

なお，各大学における諸般の事情により，上記の対応は，各大学の中央図書館に所蔵する文献資料に限られるが，その他部局図書室に所蔵する文献資料についても，可能な限り利用できるように努めることとなっている。以上が，今回の改正の要旨である。

大学図書館の相互協力は，昭和53年11月に学術審議会が，「今後における学術情報システムの在り方について」と題した答申を発表して以後，特に論議を呼ぶようになった。図書館間の文献資料の円滑な相互利用の体制の強化を更に進めることを今後の課題として提言しているからであろう。情報洪水といわれる今日にあっては，一図書館のみでは情報需要のすべてに対応することは，到底不可能である。したがって，図書館のサービス活動は，今後相互協力関係のさらなる推進を抜きにしては，論じられないだろう。図書館間の緊密な連携のもとに，相互協力の輪を，さらに広めるよう努めなければならない。

国語学・日本語学に関する二次文献について

今回は，国語学・日本語学に関する二次文献を紹介します。資料の多さ，紙面の都合上，ここでは，できるだけ包括的で，主要なものにとどめることにしました。

なお，掲載方法・記号は下記のとおりです。

1. 各項目内の配列は，原則として出版年順に従った。
2. （　）内の数字は，所蔵図書・雑誌の請求記号を表わし，㊂は雑誌・参考図書室にある新分類図書，㊐は新分類図書，㊧は旧分類図書，Pは雑誌を示す。そして，国文は国文学研究室の略である。

〔1〕 国語学・日本語学全般

A 書目・解題書

1. 国語学書目解題

東京帝国大学編　明35（㊧016,891;T）

主として明治以前の国語学関係書を解説を付けて列挙したもの。4部17章に分類し，50音順に配列する。分類目録・別名索引・著者名目録・年表を付す。

2. 明治大正国語学書目解説

土井忠生編　岩波書店　昭7（㊧016.891;D）

明治大正期に発表された主な国語学関係書について解説を施したもの。総説と各論11編から成る。収録点数46。

3. 国語科学講座　3: 国語学書目解題

亀田次郎編　明治書院　昭8（国文891;M7）

主要な国語学書を9類に分け，各時代順に配列し，解説したもの。書名索引がある。

4. 国語調査沿革資料

文部省教科書局国語課編　昭24（国文891.1;M5）

明治初年以来，文部省が各種委員会・調査会などによって行なった国語調査事業の沿革資料集であるが，その答申報告等は収めていない。付録に文献目録があり，その多くに解説を施す。

5. 国語国文学論文総目録　昭和20年8月～28年7月

斉藤清衛編　至文堂　昭29（㊂028.91;S）

終戦から8年間の国語国文関係の総目録。雑誌掲載論文（前編）と単行本（後編）の2編から成り，国語学の部では，総記から各項目に分類されており，文献約1,000点が収録されている。

6. 明治以後国語学関係刊行書目

国立国語研究所編　秀英出版　昭30（㊧016.891;K-2）

明治初年から昭和27年12月までの国語学関係の刊行図書目録。雑誌論文は含まない。各主題に分類し，それぞれ総説・歴史・各論・雑・論文と報告・書目の順に並べている。巻末に著者索引を付す。なお昭和28年以後の毎年の書目は『国語年鑑』に収録。

7. 文学・哲学・史学文献目録VI　国語学編

日本学術会議編刊　昭32（㊂028;N）

昭和20年8月から昭和30年12月までに国内で発表された日本語に関する文献の目録。単行本・雑誌・紀要・小冊子類を謄写・複製のものに至るまで収録している。巻末に収録雑誌一覧と著者索引がある。

8. 国文学研究書目解題

麻生磯次編　至文堂　昭32（㊂028.91;A2）

国語の項に国語学に関する概説書，文典，論文集，著作集，辞書類等を約80点列挙し，それぞれについて解題している。

9. 国文学国語学文献解説　奈良時代―徳川時代末期

毛利　昌編　有朋堂　昭38（㊧016.81;M5）

徳川時代の部の国語学・辞典の項（P.392―404）に国語学関係書をあげ，解説を施す。収録点数26。巻末に書名索引を付す。

10. 国語国文学研究文献目録

東京大学国語国文学会編　至文堂　昭40年―（㊐028.81;K）

昭和38年から43年まで継続刊行された年刊書。その年に発表された国語国文関係の文献の目録。雑誌と単行本の部に分かれ，さらに主題別に配列。なお，単行本の部では，全て解説がなされている。

11. 国語学研究辞典

佐藤喜代治編　明治書院　昭52（㊂810.3;K 2）

国語学全領域を大観し，研究の概況を体系的に展望する。事項編540項目と資料編707項目から成り，それぞれ項目の末尾に参考文献を付す。また付録として，文献事項を中心とした国語史年表，叢書・全集目録がある。

12. 増補国語国文学研究史大成　15：国語学

佐伯梅友ほか編著　三省堂　昭53

（㊀910.7;K-la）

書目解説に重点を置き国語研究史を総説と分野別各説とに分けて概説している。各説は総記・系統論・音韻・字音・かなづかい・文字と用字法・語源と語彙と意味・辞書と索引・てにをは・活用・文法・現代語・文章・敬語・方言・訓点・国語史・国語国字問題の18項目から成る。巻末には本書で解説した書目一覧と書名・事項索引がある。

13. 国語学論説資料索引　第１号～第13号

論説資料保存会編　北辰　昭54

（国文P810.1;K 2－2）

国語学論説資料第１号（昭和39年度論文）から第13号（昭和51年度論文）までを収めた索引。論文の原掲誌は大学・学会の紀要・機関誌を中心としている。巻末には筆者名索引（50音順）を付し，全執筆者の掲出ページを示している。

14. 国語学大辞典

国語学会編　東京堂　昭55（㊂810.3;K 3）

「国語学辞典」の改訂版。国語学に関係ある項目1600余について解説し，項目の末尾に参考文献をあげている。分類方法は，中項目主義を採用し，配列は50音順。巻末の付録に，「国語学関係参考文献一覧」（P.1047−1182）がある。

15. 国文学研究書目解題

市古貞次編　東京大学出版会　昭57

（㊂028.91;I 2）

国語学・日本語学に関する文献約40点と記念論文集数点をとりあげ，それぞれに解題を施している。

16. 日本語教育事典

日本語教育学会編　大修館書店　昭57

（㊂810.7;N 3）

日本語教育の総括的な辞典。巻末の付録に参考文献約1,200点，教科書教材約500点を収録。それぞれ主題別，母国語別に収録。

17. 図説日本語

林　大監修　宮島達夫ほか編　角川書店　昭57

（整理中）

日本語の量的性質に関する知識をとりまとめるとともに，計量的研究の達成状況を概観することを意図してつくられた書。約400項目から成り，項目ごとにグラフを掲げ解説を施すほか，出典と参考文献を示す。

B　年鑑

18. 国語年鑑

国立国語研究所編　秀英出版　昭29年—

（㊂810.5;K）

国語界の毎年の状況を記録した年鑑で，展望・文献・雑報・名簿・資料・索引の６部から成る。文献は国語関係の図書・雑誌講文・新聞記事の前年度分のリスト，雑報は研究会活動・受賞一覧等，名簿は国語関係者の名簿，資料はNHK用語委員会決定事項とことばに関する放送番組一覧である。刊行図書，雑誌論文，新聞記事の編著者名がある。

19. 国語国文学年鑑　３冊

久松潜一編　靖文社　昭14—18年（㊀810.5;K）

昭和13年から，15年の間にあらわれた国語学，国文学に関するあらゆる書誌すべてを記載しようとする意図のもとにできている。概観，雑誌所載論文目録，新聞所載論文目録，単行本目録ならびに解説・彙報の５部より成る。論文のほか分類内容一覧もあり，単行本については解説が施されている。

20. 国文学年鑑

国文学研究資料館　至文堂　昭52年—

（㊂028.91;K 3－4）

「国文学研究文献目録」（㊀028.91;K 3）を継ぐもの。国文学および国語学の年鑑，国文学一般の中の国語の項と，各時代別の国語の項に国語学に関する文献が紹介されている。

〔２〕 記事索引

21. 雑誌記事索引　人文科学編

国立国会図書館　紀伊国屋書店（㊂P 027;Z）

明治23年９月以後，国立国会図書館に収められた和雑誌中の人文科学関係論文を収録。主題による分類の中を件名の50音順に配列。件名一覧・著者索引・誌名一覧がある。

22. 雑誌記事索引　人文・社会編　累積索引版

国立国会図書館　紀伊国屋書店（㊂P 027;Z 3）

「雑誌記事索引」（P027;Z）を分野別に改編したもの。昭和23年から54年までの分を5期に分けて累積・再編集・刊行したもの。全60分冊，収録文献数のべ166万件。巻末に収録誌名一覧がある。

23．国語・言語学に関する27年間の雑誌文献目録　昭和23年―昭和49年

「雑誌文献目録」編集部　日外アソシエーツ株式会社　昭55（㊂028.801;N）

「雑誌記事索引（人文・社会編）累積索引版」をもとに，国語・言語学に関する文献目録として使い易いように再編成したもの。昭和23～49年に発表された国語・言語学に関する雑誌文献約11,000件を収録。主題別文献目録のほか巻末に事項索引（主題・人名）を付す。

〔3〕 各論

24．国字国語問題文献目録

平岡伴一編　岩波書店　昭7（㊀016.891;H）

国字国語問題の発達史と当面の諸問題を研究するに必要な文献をあげ，必要に応じて注解を加えている。基礎参考書・理論・実際・関連問題の4部から成り，著者名を見出しとして年代順に配列。

25．当用漢字現代かなづかいに関する文献目録

文部省教科書局　昭和24　学内になし

昭和21年（当用漢字・現代かなづかいの発表された年）から23年12月までの3年間に著われた関係単行書と新聞・雑誌等に発表された論文の目録。

26．最近の国語学と方言学

東条　操著　筑摩書房　昭35（国文891;T6－2）

主に昭和12年から34年までの国語学と方言学の進歩を著述したもので，主要文献を紹介しながら，その展開・動向・中心問題などについて述べている。序章11頁には，奈良時代から昭和に至る学史を簡潔に記し，同じく重要著作を紹介している。

27．日本文法大辞典

松村　明編　明治書院　昭46（㊂815;N2）

国語学および日本文法に関する主な術語を解説し，はじめに術語，語彙の項目一覧を掲げる。本文項目は50音順であるが，古語（明治以前）については歴史的かなづかいにより配列。巻末の「国文法研究史年表」に760年から1970年までの単行書を年代順に配列し，解題を付す。

28．言語学事典

A．マルティネ編著　三宅徳嘉監訳　大修館　昭47（㊂801;M－3a）

マルティネが20世紀言語学の基本概念51を選び，これを定義，解説した提要。各項の末尾に参考書を紹介している。さらに，巻末（P.409―448）に参考文献を著者名のABC順，発表年代順にあげている。

29．辞典の辞典

佃　実夫ほか編　文和書房　昭50（㊂028;J）

翻訳書も含め，日本でつくられた辞典，事典360点をあげ，くわしく解題している。そのほかに837点を紹介している。

30．辞書解題辞典

惣郷正明編　東京堂　昭52（㊂028;J2）

原則として明治以後より昭和49年に至るまでに日本で発行された辞典類を網羅的に集め，書誌解題を施したものである。約5,000点を50音順に配列。

31．国語史辞典

林　巨樹ほか編　東京堂出版　昭54（㊂810.2;K5）

国語史に関する基礎的な事項，書名，人名等を見出しとし，各項の末尾に参照すべき書物，論文等で，比較的参照しやすいものを中心にあげている。

32．日本語文法論術語索引

北原保雄編　有精堂　昭57（国文815;K10）

従来の日本語文法論において用いられてきた術語が，容易に検索できるようにこころみて編集されたものである。42種の文献から術語を採録しており，見出し語の術語をひくと，その語が使用されている原典が明記されている。

33．日本語教育文献索引
―学会誌・機関誌掲載論文編―

国立国語研究所　昭57（㊄028.81;K2－2）

2種の学会誌および12教育機関の機関誌に掲載された論文等を収録したものであり，単行本は含まない。1980年以前に刊行された入手可能なもの全てを対象としている。キーワードと著者名による文献索引（いずれも50音順）があり，利用しやすく工夫されている。

その他，雑誌・参考図書室の800～818に国語・日本語関係書，辞典等があり，各項目の末尾，巻末に文献を紹介しているものが多くあります。また雑誌**「言語」**(P800.I;G2)，**「言語生活」**(P810.I;G)，**「国語と国文学」**(P910.1K2)，**「国語・国文」**(P910.I;K4)等の総目次・総索引を二次文献コーナーに収めています。併せて利用して下さい。

（閲覧課　泉）

実例を中心とした
資料のさがし方 −24−

今回は1983年6月までに受付けた質問から7例を紹介します。今回も調査過程を記入してありますので参考にして下さい。

〔質問例　1〕

「日本版モーズレイ性格検査ハンドブック」（MPI研究会編　誠信書房　1968）の所在。カード目録でさがしましたが見当りませんでした。

〈調　査〉

①著者目録を検索。→MPI研究会編のものはあるが書名がちがう。

②書名目録を検索。→「日本版モーズレイ性格検査ハンドブック」と「モーズレイ性格検査ハンドブック」の両方よりさがしてもない。

③「全日本出版物総目録」の1968年前後のものを調査したが見当らず。

④「出版年鑑」の1968年前後のものを調査。→MPI研究会編の出版物は1969年版に掲載の「新性格検査法」のみ。

⑤「新性格検査法」は図書館で所蔵。→新分類141.93；M9→この資料に何か関連ある記述がないかを調査。

⑥〝まえがき〟に〝モーズレイ性格検査ハンドブックの書名で計画されたが、改題して発行〟という記述があった。→これにより求める資料は「新性格検査法−モーズレイ性格検査−」

〈回　答〉

さがしておられる資料は「日本版モーズレイ性格検査ハンドブック」として出版計画されましたが，実際の出版の時には「新性格検査法−モーズレイ性格検査−」の書名で出版されました。この図書は図書館にあります。
新分類141.93；M9で開架図書室にあります。

〔質問例　2〕

小西甚一著「宗祇」（筑摩書房　1971）と小原国芳著「教育の根本問題としての宗教」（出版社不明）の所在。

〈調　査〉

「宗祇」①著者，書名目録を検索。→どちらにもなし。

②他の図書館の蔵書目録を調査。→「青山学院大学歳書目録」にあり。→「日本詩人選16」というシリーズ名がついている。

③再度，書名目録で「日本詩人選より調査→見つかる。図書館で所蔵。新分類 911.108；N2　日本詩人選　第16巻：宗祇

④同志社では単行本扱いではなく叢書扱い。従って各巻著者，書名よりの検索は出来ない。単行本として調査依頼があった図書にシリーズ名がついているかどうかは現在発行中のものなら「日本書籍総目録」でわかる。→各巻著者名，書名よりさがせる。

「教育の根本問題としての宗教」　①書名目録にはなし。

②著者目録で検索すると単行本はないが「小原国芳全集」が見つかる。→この全集の第1巻に「教育の根本問題としての宗教」が収録されている。

③書名目録だけの調査では全集に収録されている場合には見つからない。従って著者目録からもさがす必要がある。

〈回　答〉

「宗祇」（小西甚一著）は図書館にあります。「日本詩人選」の第16巻で叢書扱いになっています。分類記号は新分類911.108; N2で開架図書室にあります。

「教育の根本問題としての宗教」（小原国芳著）は単行本としては所蔵していませんが「小原国芳全集」の第1巻に収録されていますのでこれを利用してください。分類記号は新分類370.8；Oで閉架図書ですからメイン・カウンターで請求して下さい。

〔質問例　3〕

自己資本比率の各国比較。特にアメリカ，イギリス，日本。

〈調　査〉

①資本に関する統計→統計書→新分類359。資本→経営→新分類335。

②新分類目録で359.335を調査。→「世界の企業の経営分析」(359.335; S 4)あり。この資料の1981年版〝統計表（P.58～）1：業種別経営諸比率一覧表″の安全諸比率の項に日本，アメリカ，カナダ，イギリス，西ドイツ，フランス，イタリア，オランダ，ベルギー，ルクセンブルグ，スイス，スウェーデンの自己資本比率がのっている。国別と業種別の両方あり。

〈回　答〉

参考室にある「世界の企業の経営分析」1981年版(新分類359.335; S 4)に日本，アメリカ，イギリス，西ドイツ，フランスなどの自己資本比率が国別，業種別にのっています。

〔質問例　4〕

明治4年3月9日に起った三河大浜事件（鷲家騒動）の参加者2名に対して下された明治4年12月27日（前後？）の民部省判決，あるいはこの事件に言及した新聞記事をさがしてほしい。

〈調　査〉

①民部省判決録があるか。→「法学文献の調べ方」(新分類320.7; I 2)で調査→大審院判決録が一番古く，明治8年以後の判決を収録。これ以前のものは記載なし。

②新聞記事→「新聞集成　明治編年史」(旧分類917; S 18)を調査。→年代順に編集。→第1巻（文久2年～明治5年）P.363に明治4年3月28日「太政官日誌」の記事〝菊間藩僧従騒擾″，P.367に明治4年4月18日「民部省日誌」の記事〝菊間藩僧従の騒擾″あり。判決に関する記事はのっていない。

③「新聞記事集成明治・大正・昭和大事件史」，「新聞資料明治話題事典」には関連記事はのっていない。

④歴史の面より調査。→「国史大辞典」(新分類210.03：K10)大浜騒動は愛知県三河大浜騒動を見よ。→〝民部省は東本願寺派に対し私集会の禁止，檀家の使役禁止を中達。僧侶台嶺と百姓喜代七の2人が死罪。″とある。参考文献として「碧南市史　2」と「大浜騒動の社会的背景」(村瀬正章著)（碧南市史料　25）がのっている。→両書とも同志社にはない。

⑤「愛知県史　第3巻」(新分類215.5; A) P.629～632大浜騒擾〝台嶺は斬罪，俗人刑せらるるもの9名，うち1人絞罪とある。

〈回　答〉

三河大浜事件についての新聞記事は短いものですが「太政官日誌」と「民部省日誌」にのったものが「新聞集成明治編年史　第1巻」(旧分類917; S 18)のP.363とP.367に〝菊間藩僧従騒擾″の見出しでのっています。判決に関しての新聞記事は見当りませんでしたが「国史大辞典　第1巻」(新分類210.03; K10参考）愛知県三河大浜騒動の項に判決内容と参考文献2点，「愛知県史　第3巻」(新分類215.5; A　閉架）P.629～632に判決内容がのっています。

〔質問例　5〕

V．クーザン著，竹越与三郎訳「近代哲学宗統史」(明治20年出版？）　この図書は原著からの英訳本の日本語訳であるが，英訳本の書名が知りたい。

〈調　査〉

①明治時代に出版されたもの。→「明治期刊行図書目録」(新分類029.11; K 4 A⁻2）で調査。→書名索引で検索→第1巻にあり。ヴィクトル　カウシン著，ヲ．ダヴリュウ　ウェート米訳　竹越与三郎重訳　丸善　明17。→英語書名，原著者名つづりは書いていない。

②原著者（クーザン，あるいはカウシン）のつづりを調査。→「岩波西洋人名辞典」(新分類280.3; I⁻1b)，「新版世界人名辞典　西洋篇」(新分類280.3; S⁻1a)，「哲学事典」(新分類103.3; T⁻1 a）いずれもクーザン（クザン）でのっている。→原著者名：Victor Cousin

③蔵書目録を調査。→「青山学院大学図書館蔵書目録」(新分類029.7; A 3)に Cousin 著，O. W. Weight 訳の図書あり。書名：Course of the history of modern philosophy.

原書名 Cours de l'histoire de la philosophie moderne，日本語書名：近代哲学宗統史より見てこの図書が原著の英訳図書と思われる。National Union Catarogue にものっている。

〈回　答〉

「近代哲学宗統史」の英語書名は Course of the history of modern philosophy です。「青山学院大学図書館蔵書目録」「新分類029.7; A 3閉架）に掲載されていました。

〔質問例　6〕

詩人〝阪田寛夫〞と作曲家〝大中恩〞の経歴と合唱音楽等の関わりについて知りたい。

〈調　査〉

①人名事典で調査。→「日本人名大事典」，「現代人物事典」などの人名事典にはなし。「年刊人物情報事典 1981」により「毎日新聞」1980年２月４日夕刊に阪田寛夫の簡単な経歴と三浦朱門の〝自我を発見・阪田寛夫君〞という文がのっている。

②阪田寛夫→詩人→文学事典で調査。→「日本近代文学大事典 第２巻」（新分類910.3; Ｎ７参考）に記載あり。大正14年10月18日大阪生れ。詩人，小説家。東大在学中，三浦朱門らと第15次新思潮を興す。朝日放送に入社。昭和43年久保田万太郎賞受賞，昭和50年第72回芥川賞受賞などの記述がある。

③著者目録で阪田寛夫の著作がないか調査。→「庄野潤三ノート」（新分類910.28N; Ｓｓ 開架）あり。奥付に略歴があり、「詩集サッちゃん」（講談社文庫）のP.168～175に阪田寛夫の自筆年譜がのっているとある。

④大中恩→作曲家→音楽事典で調査。→「音楽大事典　第１巻」（新分類760.3; Ｏ５）に記載あり。大正13年７月24日東京生れ。作曲家，合唱指揮者。まれに見る多作家でもっぱら子どもの歌と合唱作品を作っている。初期の代表作〝わたしの動物園〞，〝月と良寛〞，をはじめ〝愛の風鈴〞，〝島よ〞など日本の合唱団のレパートリーの重要な位置を占める。とくに，いとこにあたる詩人・作家の阪田寛夫とのコンビに名作が多く，このコンビによる子どもの歌〝サッちゃん〞，〝おなかがへるのうた〞なども親しまれている。→「合唱事典」（新分類767.4; Ｇ 参考）のP.268にも「音楽大事典」よりもくわしい記述がある。

〈回　答〉

阪田寛夫の経歴については「日本近代文学大事典　２巻」（新分類910.3; Ｎ７ 参考）にのっています。又図書館では所蔵していませんが，「詩集サッちゃん」（講談社文庫）に阪田寛夫自筆の年譜がのっています。大中恩の経歴と２人の合唱音楽へのかかわりについては「音楽大事典　第１巻」（新分類760.3; Ｏ５参考）と「合唱事典」（新分類767.4; Ｇ参考）にのっています。

〔質問例　7〕

明治時代の堀川の流路について調べたいのですが、その頃の上賀茂付近の地形図はありませんか。

〈調　査〉

①分類目録で調査。→地図（新分類290.38，旧分類998）→歴史（新分類216.2，旧分類919.4）

②「日本図誌大系」４：２（近畿Ⅱ）（新分類290.381; Ｎ５）P.144に〝洛北〞明治22年測量のものあり。「京都地史地図編」（旧分類919.4; Ｋ－４）に〝京都町組図略〞（明治２年刊），〝京都絵図〞（明治７年刊），〝上下京区分京都大絵図〞（明治６年刊）あり。地図ではないが「京の川」（新分類291.62; Ｏ）も参考になる。

③「京都府資料所在目録」（新分類025.16：Ｋ）のP.174以後〝地図（明治時代）の項に京都の地図が多数掲載されている。所蔵館も記入してある。

〈回　答〉

「日本図誌大系」４：２（近畿Ⅱ）（新分類290.381; Ｎ５ 閉架）P.144に明治22年測量の上賀茂付近の地図があります。又「京都市史　地図編」（旧分類919.4; Ｋ－４）に明治２年刊の〝京都町組図略〞，明治７年刊の〝京都絵図〞，明治６年刊の〝上下京区分京都大絵図〞がのっています。この他に「京都府資料所在目録」（新分類025.16; Ｋ　参考）のP.174～地図（明治時代）の項に多数の地図が掲載されており，所蔵館も記入してありますので利用して下さい。地図ではありませんが「京の川」（新分類291.62; Ｏ　開架）も参考になると思います。

書庫見学

ちょっと書庫をのぞいてみませんか。

本館には30万冊をこえる図書が所蔵されています。そのうち、開架図書室には、参考図書を含めても、６万冊たらずの本が配架されているにすぎません。

書庫には、いったいどんな資料が所蔵されているのか、ひとめご覧になってはいかがでしょう。

〔日　時〕　第２水曜日（開講期のみ）
15時10分～16時

〔集合場所〕ＡＶ室（本館２Ｆ）　　＊ただし、９月のみ第３水曜日になります。

ピックアップ

日本における最初の英語教師

ラーマ号から岸に向ってタラップが渡された。マクネイル船長は，音吉の肩を抱くようにして，一番先にそのタラップを降りて行った。…と，その時，十歳ほどに見える少年が，列の中から飛び出して，音吉にしがみついた。…「あなたたちは，なんと偉いんだろう。壊れた船で，何ヵ月もの間，あの太平洋をゆられてやって来たんだって？…ぼくもあなたたちのように，忍耐強く，勇気ある人間になりたい。ぼくもいつか，必ず太平洋を渡って日本に行く。……」〔三浦綾子「海嶺」(913.6;M16—2)〕

遭難船宝順丸に乗って1年以上太平洋を漂流したのち，北米に漂着した生き残りの音吉ら3名の日本人漂流民と，この少年ラナルドとは彼の晩年の回想録によれば「当時その地方にいたので知っていた」が，直接には会っていないようである。しかし，この1834年の出来事は，後年，彼が鎖国日本に渡航を企てる一つの遠因となった。

Ranald MacDonald

ラナルド・マクドナルド（Ranald MacDonald，1824～94）は，音吉らを救出したラーマ号の所属するハドソン湾会社に勤務するスコットランド人の父と，インディアンの族長の娘である母との間にオレゴン州のアストリア（当時英領）で生れた。長じて学校を出た彼は，カナダ領セント・トーマスという町の銀行に2年間勤務するが，17歳の時突然放浪の旅へと出る。合衆国内を点々とした後，彼はハワイのオアフ島で日本渡航の決意を持って，捕鯨船プリマス号に船員として乗り込んだ。

1848年6月27日，多数の鯨を捕えたプリマス号が北海道の沖合に停泊した時，マクドナルドは船長との約束により，それまでの収入から差し引いた形で買いとったボートに乗り込み，強引に母船から離れた。彼は焼尻島を経て，7月2日利尻島で漂流を偽装し，アイヌ人に救出される。その後，宗谷，松前，江良町を経て長崎まで船で護送され，奉行所の取調べを受けた後，崇福寺大悲庵に幽閉された。翌年米艦プレブル号に13人の漂流米船員と共に引き取られるまでの7ヶ月間，彼はここで過すわけだが，この間14人の日本人通詞に英語を教授している。日本における最初の英語教師といわれる。14人はその後それぞれ活躍するが，中でも森山栄之助という弟子はペリー渡来の際，日米交渉で大通詞として抜擢されている。

マクドナルドの回想記は，ウィリアム・ルイスと村上直次郎によって，1893年の最終原稿に伝記と資料を加えて編集され，1923年1000部限定で米国で出版された（「Ranald MacDonald」)。当館では761番のものを徳富文庫(Ⓗ)T991.09;M5）で，916番のものをケリー文庫（F291.09;M9）で所蔵している。この回想記は富田虎男氏によって邦訳され，詳しい注，解説と関係文献リストを付したものが，「マクドナルド日本回想記」として1979年に出版された(291.09;M9—2)。又，ケリー文庫にはエヴァ・マリー・ダイ著の伝記「MacDonald of Oregon」(F939.36;D）があるが，これにはオーティス・ケリー氏（1851～1932）の質問状に対する著者の返書が付されている。マクドナルドの長崎に於ける英語教育については重久篤太郎氏の「日本近世英学史」(Ⓗ894;S3)中の「日本英学の先駆マクドナルド」に詳しい。

前述の愛弟子森山は1862年，遣欧使節団の随員として本隊を追ってシンガポールを通過した際，当地に移住していた音吉と会っている。音吉が北米に漂着して約30年後のことである。

〝びぶりおてか〟　同志社大学図書館報　№34　1983年10月1日　発行
発　行　同志社大学図書館　京都市上京区今出川通烏丸東入　電話 251—3971
編集責任者　西田逸郎（図書館庶務課長）　印刷　真興社